

# 授業改善、60歳ベテラン教師への提言（1）

栗原 昭徳

Improvement of Elementary School Lessons

— Proposing Teaching Methods to an Experienced Teacher (60 Years Old) I —

KUWAHARA Akinori

(Received January 12, 2007)

キーワード

授業改善・学習規律・授業の実力

## 本論（1）（2）の要旨

2006年の10月初旬、6ヵ月後には定年退職をむかえる60歳のC教諭の2年国語授業を参観した。これが授業を通してのC教諭との最初の出会いとなった。学級の児童は12名なのだが、授業が始まる前に、子どもたちは教室の時計やチャイムの音を気にもしなかった。開始定刻に着席できず、学習準備もできなかった。端的に言えば、「学習規律」が指導されていない学級であり、授業なのであった。

学年が始まってすでに半年が経過しているというのに、授業の指導技術の中でも最も基本的な「遅刻・私語・忘れ物」が克服されていないのであった。国語授業のなかで物語文を学習するための「学習方法」は考慮されているのだが、発問が子どもに理解されづらい。無限定の発問であるので、子どもたちが応答しようのない場合があった。結果として、会話を中心として展開され、わかりやすい物語であるにもかかわらず、子どもたちが登場人物に同化しながら、考えたことをきちんと発表することができなかつたし、子ども自身が「わかった」という実感が持ちづらい授業となった。

第2回目のC教諭の授業の参観は、筆者から申し出て10月20日となった。最初の授業参観から数えて、14日後のことである。この日、3時間目の音楽と4時間目の算数を参観することになった。算数は、授業の始まりから15分間をC先生が指導して、栗原と校長先生が参観した。残りの30分間の授業は、同じ教材を用いて栗原が指導して、C先生と校長先生が参観した。授業が終了した直後の10分間、校長室でC先生に助言する時間を持った。

第3回目のC先生の授業の参観は、11月16日午後から開催されるB小学校の他学年の授業研究の日の4時間目に、筆者がC教諭の授業参観を希望するという形で実現した。この日の授業の始め方は、従来の子ども達とは違っていた。C教諭が「10、9、8」と声をかけると、子どもたちは一斉に「7、6、5、4」とカウントダウンの声を続けた。「3、2、1、ゼロ」で終わると、今度は一斉に「日直さん、お願いします」と言った。すると、日直の子どもが前に出て「気をつけ、れい、お願いします」と合図の声を発した。この声に合わせて、子どもたち全員が11時30分の定刻に、緊張感とともに授業を始めることがで

きたのであった。学習内容は掛け算九九の「6の段」であり、「6の段」の練習活動が展開された。学習規律の定着とともに、子どもたちの授業への参加の度合いや集中力は、約40日の中で明らかに向上した。

第3回目の研究協議と私の指導講話の最後、それは同時に私の参加したB小学校における3回にわたる公式の授業研究の最後でもあったのだが、私は次のようにC先生とB小学校の先生方に呼びかけた。「どうかC先生、3月下旬の終業式まで、授業改善をしつづけてほしい。ほかの先生方はC先生を支えてあげてほしい」とお願いするとともに、「C先生が退職をされる最後の日まで、良い授業をしようとして努力され、笑顔とともにお辞めになった」という風の便りが、いつの日にか、私の耳に届くことを楽しみにしていると伝えた。

## 1. はじめに

2006年10月初旬、A県、B小学校、2年生担任、C先生の授業を参観することになった。そのきっかけは、あらかじめB小学校に勤める教え子や研修主任から打診があり、9月から11月にかけて計3回の校内授業研究会に招聘されたからである。B小学校への訪問第2回目の10月4日、6ヵ月後には定年退職をむかえる60歳のベテラン教師の担任する2年の国語授業を参観することになった。これがC教諭の授業の最初の参観となった。

同年8月1日付で筆者宛に郵送された2通の派遣申請が、山口大学教育学部の私の研究室に届いた。1通は9月20日の、筆者にとってはB小学校での校内研修会に初めて参加するための文書であり、もう1通が本論で取り上げることになるC教諭が授業公開をする日の文書であった。C教諭の公開する校内研修会の申請書は次のとおりであった。

山口大学教育学部  
教授 栞原昭徳様

B 小 発 第〇〇〇号  
平成18(2006)年8月1日

A県〇〇町立B小学校  
校長 〇〇〇〇 (職印)

校内研修会の講師のお願いについて (依頼)

盛夏の候、先生におかれましては、ますますご清祥のこととお喜び申し上げます。

さて、このたび、本校内の教員の資質向上を目指して、校内研修会を下記のとおり計画いたしました。つきましては、先生をこの研修会の講師としてお招きし、御講話、御助言を賜りたく存じます。

公務御多用の折、誠に恐縮でございますが、よろしく願いいたします。

記

- |       |   |
|-------|---|
| 1 日 時 | 平成18年10月4日 (水)  |
| 2 場 所 | A県 〇〇町立B小学校   |
| 3 対 象 | 本校教職員 13名   |
| 4 日 程 | 13:30~14:15 2年生研究授業<br>国語 ようすを考えて読もう『お手紙』<br>14:30~15:30 研究協議<br>15:40~16:30 受指導・講話 |

## 5 その他、連絡先など（省略）

あらかじめ年間行事計画の中で決定されている特定の曜日の午後に、校内の教師たちに対して授業を公開し、その直後に参観者が授業をめぐって協議する。そのあと、外部から招聘された講師が教師たちに向かって指導講話をするという形は、けっして特別なものではなく、ごく一般的な校内授業研修の進め方である。

## 2. 教材「お手紙」のねらいと3場面

C先生の授業で用いられた教材は、教科書の中の物語文「お手紙」である。授業研究の場では、よく見ることのできる教材で、すでに2年生国語教材のスタンダードと言ってよい。下巻の教科書の最初の単元の中に位置づけられている教材である。この単元には「ようすを考えて読もう」という題名が付けられている。つづいて、「だれが、何を したのでしょうか。どんなことを言ったのでしょうか。」と、この教材を学習していくときの視点が明示されている。このことから、子どもたちは、登場人物が誰であるのかをはっきりと理解して、さらに「だれが」「何をしたか」を読み取るとともに、たくさんの会話の言葉を「だれが言ったか」を理解しなくてはならない。

それだけではない。作品「お手紙」につづいて収録してある「がくしゅう」のページには、さらにその先の「そのとき、そのじんぶつは 何をしていますか」や、「そのじんぶつは、どんなことを思っているのでしょうか」とも書かれている。2年生の子どもたちに対して、登場人物の言動ばかりではなくて、その言葉が発せられ行動がとられたときの「思い（気持ち）」についても、学習しなくてはならないのである。

小学校2年生の子どもにふさわしい形や用語を用いながらも、物語文(文芸文)に独自の学習方法としての、題名、作者(作・絵)、日本語にした人(訳)、じんぶつ(人物、登場人物)、「がまくん」「かえるくん」「かたつむりくん」などの呼び方、会話文(かぎ)の意味と読み方、音読のときの句読点の扱い、内の目・外の目、たしかめ読み(くわしい読み)、・・・などを、子どもの実態に合わせて取り扱う教師の構えが必要となる。

題名の「お手紙」は「手紙」とは書かれていない。「手紙」とは、どういうものであろうか。なぜ、「お」という1文字があるのだろうか、などと、最初の題名だけでも、何かありそうである。

作者はアーノルド＝ローベルであり、教科書の冒頭には作者名の下に、小さなポイントで「さく・絵」と添えられている。次の行に並べて、「みき たく やく」と翻訳者の名前も明記されている。小学校2年生にとっては、カタカナ文字の作者名、「さく・絵」、「みき たく」というふしぎな名前、それに「やく」という文字にいたるまで、この物語には、3人の人物が登場する。お手紙をもらいたいと思いつけている「がまくん」、がまくんの気持ちがわかり、親切にも自分でお手紙を出した「かえるくん」、そしてかえるくんから頼まれたお手紙を運ぶ「かたつむりくん」の3人である。

授業が公開された第3場面の教材は、次のとおりである。

秘密のうちに「かえるくん」が書いた手紙を、「かたつむりくん」が持ってくることになっている。それを「がまくん」と会話しながら、そわそわしながら「かえるくん」が待つという場面である。あとの授業の検討のために、会話の部分にだけ番号をつけた。(挿絵は省略し、改行も教科書の記述のとおりではない。)

がまくんは、ベッドで お昼ねをしていました。

① 「がまくん。」

かえるくんが言いました。

② 「きみ、おきてき、お手紙が来るのを、もうちょっと まってみたらいいと 思うな。」

③ 「いやだよ。」

がまくんが言いました。

④ 「ぼく、もう まっているの、あきあきしたよ。」

かえるくんは、まどから ゆうびんうけを見ました。

かたつむりくんは、まだ やって来ません。

⑤ 「がまくん。」

かえるくんが言いました。

⑥ 「ひょっとして、だれかが、きみに お手紙をくれるかもしれないだろう。」

⑦ 「そんなこと、あるものかい」

がまくんが言いました。

⑧ 「ぼくに お手紙をくれる人なんて、 いるとは思えないよ。」

かえるくんは、まどから のぞきました。

かたつむりくんは、まだ やって来ません。

⑨ 「でもね、がまくん」

かえるくんが言いました。

⑩ 「きょうは、だれかが、きみに お手紙 くれるかもしれないよ。」

⑪ 「ばからしいこと、言うなよ。」

がまくんが言いました。

⑫ 「今まで、だれも、お手紙 くれなかったんだぜ。きょうだって同じだろうよ。」

かえるくんは、まどから のぞきました。

かたつむりくんは、まだ やって来ません。

この場面の登場人物は、「がまくん」と「かえるくん」の二人である。「かたつむりくん」は、記述として「かえるくん」の思いの中には出てくるが、「かたつむりくん」自身がこの場面に登場してはいない。しかし、この場面では「がまくん」が、「かたつむりくん」のことを知ることはない。

本論の形式で、全部で25行の場面である。そのうち、会話が12行分を占める。約、半分が会話で構成されている場面なのである。

会話は、もちろん登場人物の会話であるから、読者は簡単にこの場面の登場人物に同化することができる。会話を音読する「活動」を導入するだけでも、子どもたちは簡単に人物の気持ちを考えて、発表することができる。

### 3. 「がくしゅう」(学習の手引き) と授業の実際

教材「お手紙」の本文は、教科書では12ページを占めている。本文のすぐあとには、全3ページの「がくしゅう」が続いている。この「がくしゅう」は、従来のいわゆる「学習の手引き」のことであり、子どもたちの学習の方法や方向性を決める重要な役割を担って

いる。それは、同時に、教師として、どのような学習を進めるべきかが記述されているのである。

(教科書16ページ)

▼「お手紙」には、かえるくん、がまくん、かたつむりくんの 三人のじんぶつが出てきます。じんぶつが言ったことや したことで、おもしろいなと思ったところは どこですか。

手引きとしての「がくしゅう」を読むかぎり、「じんぶつ」ないしは「登場人物」として、2年生の国語の授業では、かならず取り扱わなければならないということが分かる。

▼会話（かぎ「 」のところ）の読み方に気をつけて、声に出して読みましょう。

つぎのような じゅんじょで、すすめます。

●グループをつくって、会話を読む人、会話ではないところを読む人などの、やくわりをきめましょう。

●会話の一つ一つについて、つぎのことをたしかめ、どのように読むかを話し合いながら、れんしゅうしましょう。

- ・だれが言ったことばですか。
- ・そのとき、そのじんぶつは 何をしていますか。
- ・そのじんぶつは、どんなことを思っているのでしょうか。

3人の登場人物の会話で成り立っているような作品であるが、作品の後に示してある「がくしゅう」には、その会話の練習の仕方も示してある。この「お手紙」の授業では、会話の指導が鍵を握っていることを示している。

(教科書17ページ上段)

(女児の顔の絵 (省略) からの吹き出しのように)

『読んでみるね。』

(おこったように)

「ばからしいこと、言うなよ。」

(小さい声で、元気なく)

「ばからしいこと、言うなよ。」

(男児の顔の絵 (省略) からの吹き出しのように)

『どっちがいいかなあ。』

●グループごとに、はっぴょうしましょう。

会話の読み方の練習を、グループで行う方法を示している。

以下「がくしゅう」の記述だけを収録する。

## (教科書17ページ下段) 「ことば」

だれが どうした

- ・ がまくんが 言いました。

この文には、「だれが」「どうした」かが書いてあります。

- ・ えんぴつと紙を見つけました。(7ページ)

この文には、「だれが」が書いてありません。でも、お話の中で、この前や後の文を読むと、だれが見つけたのか分かります。

お話を読むとき、「だれが」「どうした」に気をつけましょう。

## (教科書18ページ上段)

## 「書く」

- ▼かえるくん、がまくん、かたつむりくんに、手紙を書きましょう。

『かたつむりくんへ

四日も、ずっと歩いて手紙を届けたのは、えらいと思いました。

がまくんがよろこんでくれて よかったですね。 おがわ さき』

## (教科書18ページ上段)

「来る、家、帰る、昼ね、親愛、読み方、後」の読み方と書き順 (省略)

## (教科書18・19ページ)

## 「何が どうした」

(女児の絵の吹き出し) 「ぼうしが。」

「ぼうしが。」と言うだけでは、「どうした」かが分かりません。

(男児の絵の吹き出し) 「おいしいよ。」

「おいしいよ。」だけでは、「何が」おいしいのかがつたわからないことがあります。

(母親の絵の吹き出し) 「どうしたの。」

「何が」と、「どうした」や「どんなだ」とが、そろった文にすると、言いたいことがあいてに きちんとつたわかります。

文の中で、「何が」「何は」「だれが」「だれは」に当たることばを、**主語**といいます。

## (教科書20ページ)

また、「どうする(どうした)」「どんなだ」「なんだ」に当たることばを**じゅつ語**といいます。

ぼくが 話す。 (どうする)

ぼくは 元気だぞ。(どんなだ)

ぼくが 当番だ。(なんだ)

- ▼下の絵を見て、主語とじゅつ語が そろった文を 作りましょう。(絵は省略)」

## (21～23ページ) かん字の読み方 (省略)

## (24・25ページ) 見たこと、かんじたこと (省略)

以上のように、作品「お手紙」をふくむ単元「一 ようすを考えて読もう」の中には、12ページ分の作品のほかに、ほぼそれに匹敵する10ページ分の「がくしゅう (学習の手引き)」「書く」「何がどうした」「かん字の読み方」「見たこと、かんじたこと」などが含まれているのである。

教師が一つの単元に含まれている作品を使って授業を構想するときには、これらの記述を参考にする必要が出てくる。少なくとも、じんぶつ (人物、登場人物) や「だれが」「どうした」や「見たこと」と「かんじたこと (思ったこと)」などの、物語を読み進めるときの独特の言葉を、教師が意図的に使ってみたり、子どもが使ったときには教師が「その場での取り上げ評価」をして際立たせたりする必要がある。作品だけを取り扱うのではなくて、作品とそのあとの学習事項をふくめての「単元 (まとめ)」だからである。

## 4. C先生の指導案と指導方法上の問題点

授業公開のために準備されたC先生の指導案中の本時案の部分は、次のとおりである。公開授業は、全12時間の扱いのうちの「第6時間目」であった。

以下の本時分の指導案のなかに◆印と番号をつけて、筆者の検討を進める。

- (1) **主眼** がまくんを励ます「かえるくん」と手紙をあきらめた「がまくん」の気持ちを讀みとる。◆1
- (2) **準備** 挿絵、会話文、シール
- (3) **学習過程**

学習活動・内容	子どもの意識の流れ	教師の支援・具体的評価基準
1 前時の学習内容を想起した後、第3場面を読み本時の学習課題を知る。	・かえるくんは、急いで帰り、がまくんに手紙を書き、かたつむりくんに配達を頼んだね。	・前時のかえるくんの行動からかえるくんの気持ちを思い出させる。
会話文やしたことから、がまくんとかえるくんの気持ちを考えよう。		
2 かえるくんとがまくんの会話文を比べながら、それぞれの気持ちを想像する。 ・がまくんの気持ちとそのわけ <児童の疑問等> ・ベッドでなにをしたか ・なぜベッドで昼寝をしていたか	・がまくんは、この色でこのくらいの大きさだ。 ・あきあきした ・ばからしいこというなよ	・昼寝をしているがまくんの気持ちを色シールで表現させる◆2。 ・子ども達の疑問や確かめたい事柄を、児童の発表にあわせて解決しながら、読み進めていきたい。 ・会話文をがまくん・かえるくんに分け、対比させる事で思考をたすける。 ・がまくんの気持ちが落ち込んでいく様子を想像しそのわけをとらえることができる。(シール

<ul style="list-style-type: none"> <li>・もう待つのは、何と言ったか</li> <li>・あきあきしたって言ったわけ</li> <li>・手紙をくれる人がいるとは思えないわけ</li> <li>・手紙が来ないと信じているわけ</li> <li>・かえるくんの気持ちとそのわけ</li> </ul> <p>&lt;児童の疑問等&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・窓から郵便受けを見たわけ</li> <li>・窓から覗いたわけ</li> <li>・だれかがお手紙をくれるかもしれない、と言ったわけ</li> </ul> <p>3 本時を振り返る</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・郵便受けを見たよ</li> <li>・何回も起こそうとしている</li> <li>・早くがまくんを元気にしたいからだね</li> </ul> <p>・だいたいできたかな</p>	<p>貼り・線引き) ◆3</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・がまくんの気持ちの変化がつかみにくいようであれば、かえるくんのしたことをがまくんが知っているか否か考えさせたい。</li> <li>・かえるくんの言動や挿絵からかえるくんの気持ちを色シールで表現させる。◆3</li> <li>・かえるくんの気持ちを想像しそのわけをとらえることができる。(シール貼り・線引き)</li> <li>・同じ言葉が繰り返し使われている意味についても考えさせたい。</li> <li>・自己評価をし、その気持ちを次時への意欲につなげたい。</li> </ul>
--	--	--

### 指導案の検討、問題点など

#### ◆1 「気持ちの読み取り」と「言動の読み取り」の違い

C先生の授業の主眼（ねらい）として、「がまくんを励ます「かえるくん」と手紙をあきらめた「がまくん」の気持ちを読みとる」（下線は筆者）と書かれている。これに対して、単元のねらいとしては、「だれが、何を したのでしょうか」と「どんなことを 言ったのでしょうか」が作品の前の単元名の下に「学習のねらい」として明示されている。単元の目標は、いわば「登場人物のしたこと、言ったこと」、つまり「登場人物の言動」を読み取ることが明記されているのである。

登場人物の「気持ち」を読み取るのと、同じ登場人物の「言動」を読み取るのとでは、学習の手立てが違ってくる。単元のねらいの「言動」とは、言葉と行動のことであり、「言動」はそのまま作品の文章として記述されている。それに対して、C先生の「気持ち」の読み取りは、そのまま文章として記述されているというよりも、この作品では主として会話の形で表現されている登場人物の「言葉」を読み取ることを通して、登場人物に同化しながら感じ取らなければならない。

重要なことは、たくさんの会話文を音読しながら、刻々と変化する言葉に対応した気持ちを感じ取るという方法が採られなくてはならないということである。

#### ◆2 色シールで「気持ち」を表現することの意味

子どもたちが登場人物の気持ちを表現するときに、色シールを用いるという方法が取られている。色の違いによって、登場人物の気持ちや、気持ちの変化を表現しようとするの



であるが、色の数以上には気持ちの違いを表現できないことになる。登場人物の気持ちと、その気持ちの変化の仕方は、色の違いのような大雑把なものではない。だからこそ、言葉をもちいて語らないことには、人間の気持ちを表現することはできないのである。

色で人物の気持ちを表現するという方法は、子どもの学習参加を促すという観点から考え出されたことであろうが、話し言葉で気持ちを言い表すのが得意な小学校低学年の子どもの学習を、抽象的で、分かりづらいものになっているのではないか。

### ◆3 がまくんの気持ちが落ち込み（変化）を読み取る方法

第3場面の最初で「お昼ね」している「がまくん」の気持ちは、どんどん落ち込んでいくばかりである。気持ちが落ち込んでいく様子を「シール貼り・線引き」を通して探そうとするのであるが、この作業も、子どもにとっては参加しづらい。

それよりも、C先生が授業の中で短冊の形で書きあらわした言動を、人物ごとに順序よく並べて、それを見ながら気持ちの変化を読み取ることの方が分かりやすい。

人物ごとに類別して並べた短冊を、大きな声で一斉に音読しさえすれば、気持ちの変化を容易に読み取ることができるのである。同じ人物の言動を追っていけば、簡単に気持ちの変化は把握できる。その意味で、下に示したような登場人物の言動の類型化は、子どもにとっては有効な思考の材料となる。また、C先生の板書の構成の仕方は、優れていると評価できる。

### ●「お手紙」第3場面の板書構成

◆がまくん	◆かたつむりくん	◆かえるくん
<p>がまくんは、ベッドで お昼ねをしていました。</p> <p>「いやだよ。」 がまくんが言いました。 「ぼく、もう まっているの、あきあきしたよ。」</p> <p>「そんなこと、あるものかい」 がまくんが言いました。 「ぼくに お手紙をくれる人なんて、いるとは思えないよ。」</p>	<p>かたつむりくんは、まだ やって来ません。</p> <p>かたつむりくんは、まだ やって来ません。</p>	<p>「がまくん。」 かえるくんが言いました。 「きみ、おきてさ、お手紙が来るのを、もう ちょっと まってみたいらしいと思うな。」</p> <p>かえるくんは、まどから ゆうびんうけを見ました。</p> <p>「がまくん。」 かえるくんが言いました。 「ひょっとして、だれかが、きみに お手紙をくれるかもしれないだろう。」</p> <p>かえるくんは、まどから のぞきました。</p>

<p>「ばからしいこと、言うなよ。」 がまくんが言いました。 「今まで、だれも、お手紙 くれな かったんだぜ。きょうだって同じだ ろうよ」</p>	<p>かたつむりくんは、まだ やって来ません。</p>	<p>「でもね、がまくん」 かえるくんが言いました。 「きょうは、だれかが、きみに お手紙 をくれるかもしれないよ。」  かえるくんは、まどから のぞきました。</p>
---	---------------------------------	--

実際の板書は縦書きであり、「上の段」と「下の段」に人物の言動を分けて、短冊に書かれた、それぞれの人物の言動を並べていくことになる。ベテランらしい国語の指導の仕方であり、国語の指導技術としては、これ以上の方法はないということもできる。

しかしながら、人物ごとに言動を書き出した短冊を貼り出したのは、C先生自身だったのである。短冊を貼り出す仕事は、短冊に書かれている言葉を読み取り、あてはまる人物の位置に並べなくてはならない。これこそ、厳密な意味における「学習活動」にほかならないのである。授業における学習活動の主体は、子どもたちでなくてはならない。子どもたちにとっては、学習をめぐる活動が可能となるせっかくのチャンスであったのだが、教師が活動してしまったのである。

登場人物ごとの言動が、短冊を並べることによって、三つに区分された。その直後の教師の発問は「自分で、がまくんの気持ちのわかるなあということ、ない？」であった。その発問を聞いていた子どもたちの中から「どういうこと？」という質問の声が発せられた。答えようにも、答えようのない、子どもにとっては答えづらい発問なのである。

なぜなら、第3場面での「がまくん」と「かえるくん」の会話は、全部で12もあり、その会話の言葉が発せられるたびに、両者の気持ちは変化していくのである。どの言葉を使ったときの気持ちなのかを、限定して問わなくてはならないのである。

## 5. 授業の全体的な印象

### a. 学習規律の指導が不十分であること

在籍する児童は12名と、比較的小さな学級なのであるが、授業開始の直前、子どもたちは教室の時計を見るでもなく、授業開始のチャイムを気にするでもなく、さらに、開始の定刻に着席することもなく、机の上に学習用具を準備することもなかった。学習参加のための自主的なルールやマナーである「学習規律」が定着していないことが、明らかに見える授業なのであった。

新任教師の三つの悩みでもある「遅刻・私語・忘れ物」のある学級であった。物語文の学習のための仕掛け（学習方法）は、たとえば板書の上で「登場人物ごとに言動を区分する」という手立てが配慮できているのだが、教師の発問が子どもに理解されづらい。というのは、本時の学習場面全体、つまり大きな範囲を問題にしたずねる発問であるので、子どもたちが応答しようのない場合があった。結果として、会話を中心として展開する、わかりやすい物語文であるにもかかわらず、子どもたちが登場人物に同化して、積極的に登場人物の気持ちを発表し合い、考え合うことができなかった。

筆者がこれまでに体験したことがないほどに、そのときの研修が「特別な授業研究会」

となったのは、その日に公開された授業の事実にあった。というのは、指導者の教職経験は、これ以上にはないほどに十分であったのだが、経験年数に見合った指導の結果としての子どもたちの「学習活動」が十分とはいえなかったからである。

#### b. チャイムを気にしない先生と子どもたち

授業の始まりは、以下のとおりであった。

授業の開始時刻は13時30分であったが、筆者は5分前の13時25分には2年生の教室に入らせてもらった。授業の始め方や学習準備の様子を見せてもらうためである。数人の子どもたちが「かいじゅう」という言葉を使いながら、ふざけあっている。

子どもたちの中には自分の座席に着席してはいるのだが、机の上に教科書の出している子どもはいるものの、全員ではない。ノートなどの学習用具を準備している子どもは見られない。

13時30分、定刻にチャイムが鳴る。しかしながら、教師も子どもたちも、それまでにしていた私語を続けたままで、チャイムが鳴ったことに注意を払っていない様子である。どうやら、一人の男児のノートが見当たらないか、忘れ物をしたらしい。

教師が「ここでひっかかっと思ったんじゃあ、前に進まないから。じゃあ、始めましょう」と声をかける。すると、日直の子どもが前に出て「気をつけ」と合図する。チャイムが鳴り終わって30秒が経過した時点であった。つづいて日直が「れい」と合図する。子どもたちは声をそろえて「お願いしまあす」と授業始まりの挨拶をする。

T「いつもの調子でやってください」といって、さっそく「前の時間、かえるくんは何したの?」と問いかけた。13時32分のことであった。

#### c. 私語的発言を取り上げる教師

子どもたちは、口々に「手紙を書いた」「かたつむりくんに頼んだ」「4日たった」などと着席したままで発言した。子どもたちが挙手するでもなく、教師が指名するわけもなく、私語的な発言で授業が進んでいく。子どもたちが口々に発する言葉を拾っては、教師が確認し、「お手紙」という題を板書した。このあと、「教科書を開けてください」と指示した。そのあと、教師は「みんなで今日のところを読んでみましょう。せえの」と、子どもたちが一斉に音読しやすいようにとの心配りから「せえの」という始まりの合図も付け加えた。しかし、子どもたちが、声をそろえて一斉に同じ文章を音読することはできなかった。

そのうえ、音読のときの姿勢（教科書を立てて読む）や椅子への座り方もできていない。音読をするときの基本ともいうべき句読点で区切ることもなされていない。子どもたちの音読の様子を見ると、口を大きくあけて読んでいる子どもは少なく、発声の仕方もできていない。

#### d. 短冊を動かすのは教師

教師の発問「だれが出てきましたか」と登場人物をたずねる。子どもたちは私語的な発言をしているのだが、私語の中の言葉を教師が取り上げて、授業が進んでいく。

本時のメインの学習活動となるはずの、短冊を読み、内容を考えながら黒板に区分けしていく学習は、T「分けていきましょう」という学習方法を示す言葉と、つづく教師の発問「寝ていました、これは誰ですか?」と問いかける。子どもたち「がまくん」と答える。

ところが、短冊を動かす操作は、C先生がすることになってしまった。

### e. 学習準備・授業始まり・日直の合図も学習活動であること

この学校の「経営概要」中の「経営の構想」には、次のような記述が見える。

- 教育目標 「豊かな心をもち、たくましく生きる子ども」
- めざす児童像 「自ら考える子、やさしい子、がんばる子」
- 学校経営の方針 ①学校や地域の特性を生かした特色ある学校づくり
  - ②子ども一人一人を大切にされた教育活動の展開
  - ③学校・家庭・地域が一体となった教育の推進

さらに、子どもたちが、自分の力で取り組む「チャレンジ目標」も、下のように掲げられている。この目標は、子どもたちがチャレンジする目標である。これらは、子どもたちにとっての「目じるし」で、「目あて」である。

- チャレンジ目標
    - <学習のきまり>①学習の用意をしておこう
      - ②よいしせいをしよう
      - ③手をまっすぐにあげよう
      - ④ていねいな言葉で発表しよう
      - ⑤人の話はだまって最後まで聞こう
    - <生活のきまり>①あいさつをしよう
      - ②ろうかはしずかに歩こう
      - ③はきものをそろえよう
      - ④みなりをととのえよう
      - ⑤チャイムをまもろう
- (注、下線は筆者)

下線を付けた項目を、下に書き出してみると、次のようになる。

- <学習のきまり>①学習の用意をしておこう・・・「忘れ物」
  - ⑤人の話はだまって最後まで聞こう・・・「私語」
- <生活のきまり>⑤チャイムをまもろう・・・「遅刻」

この三つの内容とは、じつは「新任教師の三つの悩み」なのであり、「学習規律」の中の最も基本的で、学年始めの初期に取り組まなくてはならない項目なのである。その項目については、この学校では<学習のきまり>ないしは<生活のきまり>として、学校としての統一的な取り組みが期待されていたのであった。しかし、2年生のC先生の学級では十分な取り組みではなかった。

大切なことは、「遅刻・私語・忘れ物」の克服も、授業における教師の指導対象であり、子どもから見れば「学習活動」の一つであることを見落としてはならない。

## 6. 授業改善のための提言

### a. 「私のアドバイスを聞いてくださいね」

葉原「C先生、昭和21年生まれですかね。私が20年生まれですからね。」

C先生「そうですね。」

栞原「女性に年齢を聞くのはわるいのだが、まあみんなが知っているんだから、いいですね。」(研修参加者、笑い)

栞原「私は昭和20年の8月1日生まれです。2週間ほど「戦中派」ですね。先生は「戦後派」ですよ。」

C先生「同じじゃないですか。」

栞原「いやいや、同じじゃあない。先生は戦後派だから。何月何日？」

C先生「つい最近、みんなに(還暦の)お祝いをしてもらいました」

栞原「私は、あのときには(60歳の還暦のときには)お祝いはなかったね」(参加者、大笑い)

栞原「いやあ。まあ、そのへんから話しましょう。」

まあ(言えることは)C先生より年上は、公立の学校現場にはいないのですよ。今日は(61歳の)私に来ていただけですね。今日は、私の方が(ほんの少し)先輩だから、私の言うことくらいは聞いてください。なにしろ、私の方が、先輩ですからね。まずは、そのことが、いいたかったのですね。」(参観者、笑い)

#### b. ベテランにふさわしい授業をしなくては

C先生は、この職場でいちばん年上ですし、最後の年ですから、後輩の先生方に「このようにしなさい」と言えるぐらいの立派なこと(授業実践)をしなくては、本当はいけないのです。

教育の世界というのは、みんなが、とても親切です。若い人、つまり30歳台の人が今日の授業をしたのと、60歳の人が今日の授業をしたのとでは、良いにしろ、そうでないにしろ、評価の仕方が違うと思います。この職場の先生方みんなが暖かい気持ちで接していらっしゃるということもわかりました。

それで大切なことは、この10月1日が、ちょうど60歳の誕生日であったということですから、誕生日を迎えたあたりから、C先生は、(これまでとは)だいぶ変わったということになってほしいのです。今日を境にですね。

でも、あまり変わりすぎてもたいへんですから、3月31日まででいいですからね。半年だけ、がんばってみてもらって、今から、やってみてもらって、きっと、あの子どもたちが良くなることを、私も授業研究をはじめて約40年近くですので、その智慧を、今から30分、40分ほどかけて言おうと思います。

とはいっても、C先生ひとりに言うわけではなくて、みんなも聞いているわけですから、みなさんは、ぜひ、今から最後の半年のあいだにC先生がきつとがんばられるだろうから、今日から、ベテランががんばると、どういうことが起きるかという目で見えてあげてください。きっと、なにかすごいことになると思います。

理論は簡単なのです。そして、(C先生が)やってらっしゃることも半分はできているわけです。それが、私の抱いている「希望」です。まずは、最後の半年、本人ががんばるということ、みなさんも、支えてあげるということですね。

#### c. ベテランの先生を支えるということ

じつは、私、近県のいろいろ学校現場に出かけて、たくさんの授業を見ます。その中で

も、みなさんに、ぜひとも紹介したい学校があります。

それは日光小学校と言って、大山のふもとの海拔450メートルくらいの位置にある小学校です。その学校に、教頭として勤められ、そのまま校長として勤められたS先生という校長先生がおられました。その、S先生は、若いころからとてもがんばっておられて、途中、病気で倒れられたりとか、病休を取られたりとか、いろんなことがあったのです。小さな学校ですけどね、たいへんすばらしい実践もお互いし始め、道徳の授業だとか、国語の授業で、もう鳥取県でも指折りの学校です。私も、もう、おそらく10年近く行っている学校で、私が誇りにするような学校です。

その学校で、S校長が最後の年に、体調を崩したのですね。それで、校長先生は辞めるつもりでした。しかし、私はね、いろいろ相談を受けたときに、「辞めてはいけません」と言いました。そして、ほかの先生にこう言いました。

「S校長先生に、あまり仕事をさせてはいけません」と。

校長先生ですから、校長室に机があればいいのです。「だから、職員室には、(校長先生の)机はなくてもいい。」これは、冗談で言ったのですが、本当に机が置いてなかったですね。理由は、職員室が狭いので、校長先生の机を置くスペースがないということでした。喫茶店風の丸い机と椅子が置いてあるだけなのです。そのような形で、日光小の先生方は校長先生を支えました。そして、校長先生がお辞めになる年には、すごい公開授業をして、とうとうS校長先生に「私が抱えていた教育の夢を、先生方が実現してくれました」と言わせました。

だから、C先生が、今からやりやすいように、本当の意味での支援ですね。支え、助けることを、まずは、この職場の先生方一人一人がやってほしいということです。それと、今から私が言うことを少しはまともに聞いてくださって、ベテランというのは(若いときからの)蓄積がありますから、その気になったら早いのです。そう思って聞いてください。

今日、(C先生の自評の)最初の言葉に、だれが言ったとか、馬鹿といったとか、お互いケンカをするということ、何度も言われました。これは、私もいろんな学校に行きましたが、たとえ1年生の1学期でも、授業が成立していないときにはケンカが多いのです。だいたい、いさかい、ケンカ、殴り合い、意地悪、悪口、そういうつまらない、良くないことがたくさん起きている。ついでに、保健室から見たら、ケガが多いとか、欠席が多いとかいうときは、たいていの場合、授業が成立していないのです。つまり、子どもたちというのは、勉強するために(学校に)やって来ていると思っている。とりわけ本人たちは、そう思っているのです。その勉強がまっとうに成立していないとき、そのエネルギーは、必ず人間関係に向かうのです。

だから、自分のクラスでちょっと今、(子どもたちが)ざわざわしたり、授業内容以外のことばかりしているなあといいときには、ちょっと振り返ってみると、授業が成立していないのです。今日(授業を)見ても、授業がまったく成立していないというわけではなくて、先生のちょっとしたやり方でほとんどうまく好転するのです。

#### d. 教師としての言葉使い

C先生の話し方は「早口」です。それに言葉数も多い。子どもたちの顔を見ながら、選んだ言葉をゆっくりとした口調で、丁寧に伝える必要があります。

それで、第一に、そういう心がけをもとにして、先生の「言葉使い」に気をつけることです。子どもの前に立つ教師は、近所のおばさんが、近所のおばさんに話すような話し方をしてはいけないのです。

やはり、「先生は、こう思います。」「…です。」「…ます。」とか、「こうこう、こうです。」とかね。なるべく標準語に近い言葉、きちんとした言葉使い、はっきりとしたものの言い方をする。これをまず、心がけてみてください。

そして、そのきちんとした日本語、ロゴス（言葉）で、教科の論理を語ってやらなくてはならないのです。これは、算数でも国語でもみんな同じです。正しい日本語で、きちんとした中身を語ってやらなければならないのです。

今日の授業でいうと、「みんな、一度、先生が書いた、教科書と同じなのだけど、これを見て読んでごらんよ。」と言って、きちんと音読させる。その音読も、三人ずつほどいるのだったら、まあ、「地の文」はこの三人、「がまくん」はこの三人、「かえるくん」はこの三人というように、「役割読み」をやって何度か読ませる。これが「活動」なのです。

音読というのは、意味を考え、注目していないと絶対に成立しない活動なのです。これは国語でも算数でも音読が成立していたら、だいたい（学習）活動が成立しているのです。

つまり、授業の中で音読を多用しなさいということです。そして、何のためかという、子どもが学習内容に乗り込むためには音読がいちばん容易で簡単な方法なのです。

音読をするために、きちんとした姿勢をして本を読む。本の持ち方も、発音や発声も、自分が精一杯よくなるような方法をとるといことです。それは、先生がやってみせて、みんなにやらせてみせれば、おのずとまくなります。これも授業指導の一部なのです。

そのときの（そのような指導をするときの）、論理ですね、一貫して考えなくちゃいけないことを、ちょっと私が（黒板に）書きます。これは、いまから40年前のことですが、私が大学院の時代にドイツ語の本を読みながら、勉強したのは、たったこの一節だけなのです。書いてください。（栗原、声に出しながら）

「指導とは（つまり、「授業とは」といことです）、

子どもの学習活動を、（無ければ）惹き起こし、促進し、発展させることである。」

子どもというのは、教師と出会った最初の日から勉強する意欲や構えがなくてもいいのです。とにかく元気に学校へ来てくれて、教室に入って来て、教科書とノートを開いて座ってくれたら、もう、そのあとは先生の責任です。

「惹き起こす」という言葉を二文字の漢字の熟語であらわすと、何でしょうか。そうです。「惹起（じゃっき）する」です。要するに、指導というのは、つまり先生の仕事というのは、子どもの活動（生き活きとした動き）、つまり、子どもがすぐにでも取り組んでみたくするような仕事を構想する名人のことです。

子どもたちが学校に来はじめる最初から、学習への高い意欲や関心がなくてはならないということではないのです。最初は、たとえば学習意欲は無くてもいいのです。

学年の始めには、学習意欲は無くてもかまわないのです。ただし、始めだけですよ、無

くてもいいのは。始めには、学習意欲なんて無いのです。だから、学習意欲がなければ惹き起こし、つくってやり、それを促進し、発展させることです。要は、先生の仕事というのは、子どもの学習活動をいかに活発にしていくかということにほかならないのです。

#### e. 授業の始め方

そうすると、授業が成立するためには、まず、チャイムの合図と同時に席に着いてくれなくてははいけません。それどころか、(子どもが自分で) 時計を見て、「今日は先生がたくさん来るし、校長先生も教頭先生も6年生の先生も来られるのだから、がんばろう」と言って、5分前くらいに「先生、あと〇分よ」と、子どもが言い始める。「それなら、ちょっと準備しよう」と言って、教科書を開き、ノートを開き、できれば、今日の場面の音読でもしていたらもう満点じゃないですか。

それを先生が「しなさい」と言うのではなくて、「みんな、何をしたらいいと思う?」「そうそう、本も読んでおこう」などと言って、子どもが少しでも学習内容に近づくような始め方の指導をしなくてはならない。あの子どもたち、少しほめたら、いくらでもできますよ。よく(話を)聞いていますよ。

ということで、授業のはじまりも、先生が「ああしろ」「こうしろ」というのではなくて、「今、何分かね?」「あと何分くらいしたらチャイムになる?」というふうに聞いたりして、子どもの活動を惹き起こしてやらなければならない。そして、「あなたたちは、10分前なのに、よく席に着いて、もう(教科書を)開いている人がいるね」というふうにして、三人グループでやったら「お互いが教え合っている人もいるね」などというふうにして、「あなたたち、やればできるじゃないの」という、評価を通して、誉めることを通して、その気にさせてやらなくてはならない。

まず、授業のはじまりも仕事のうちです。今日の日直のはじめと終わり、うまかったですね。ああいうことを、きちんと学年始めからやっていますから、今はもう、定着して、練習しつくして、うまくなっている。これはとても大事なことなのです。先生が指導したということ(証拠)なのです。

「授業改善、60歳ベテラン教師への提言(2)」へ続く。